

北海道クルーズ振興協議会が創立 20 周年総会に参加

2023-5-25 池田良穂

去る 5 月 23 日、札幌で北海道クルーズ振興協議会の 20 回目の総会が開催され、北海道内の港湾、観光地などの関係者が参加した。

筆者は、同協議会の設立総会で記念講演をさせていただいたのがご縁で、協議会会員にしているが、遠いこともあって、これまでなかなか総会に参加することは叶わなかった。今年、関西にある北海道のふるさと会の 1 つである「関西室蘭会」の会長を仰せつかったこともあり、故郷室蘭市の青山市長を表敬表門する機会に、同協議会の総会にも参加させていただくことにした。

前夜泊した登別温泉から、車で室蘭港の港口にかかる白鳥大橋を渡って、室蘭市内へと入った。橋の上からは、室蘭港の全景が見え、まさに絶景。

橋を渡ったたもとの祝津地区には、道の駅みたら室蘭とヨットハーバーが整備されていて、港内巡り、室蘭の地球岬等の断崖絶壁を海上から見るクルーズ(有名なドーバーの壁を思わせる絶壁です!!)、そしてイルカウォッチング・クルーズ等を行う観光船の発着場もある。

また、この地区に 22 万総トン級の大型クルーズ客船が着岸できる、北海道では唯一のクルーズ埠頭も整備された。市役所で青山市長とお会いした時も、クルーズの話題で大いに盛り上がった。千歳空港から高速道路で 1 時間程度というアクセスの良さを活用して、室蘭港を北海道クルーズの拠点港にできれば、大きな経済効果が期待できるはずだ。鉄鋼の街・室蘭は、今は、海上風力発電の基地としても注目されており、今後の発展が期待されている。



室蘭港の入口に近い祝津地区にある道の駅を中心とする親水緑地。この近くに 23 万トンまでのクルーズ客船が着岸できる北海道唯一の岸壁が完成している。



小型観光船桟橋には 3 隻の観光船が停泊していた。室蘭周辺の各種クルーズを行っている。道の駅みたら室蘭に隣接している。



室蘭の 3 隻の観光船。左から「徳進丸」、「Rising Dragon」、「Rising Star」。



青山室蘭市長とのツーショット。

さて、翌日、札幌で開催された北海道クルーズ振興協議会の総会に出席した。各地のクルーズ振興協議会は、各地方におけるクルーズ誘致の促進、クルーズの認知度の向上、地域のクルーズマーケットの開拓等を目的に設立された団体で、地方運輸局の中に事務局をおいて活動しており、関西、北海道、九州、中国、沖縄等にあり、中でも北海道クルーズ振興協議会は、北海道内のクルーズ船が使える港の施設をまとめた資料を作成している他、各港のクルーズ客船の入港実績、クルーズの誘致活動に関する情報等の発信の他、毎月メールマガジンを発行して、クルーズ、フェリー、遊覧船などの客船に関する情報を発信するなどの活発な活動をしている。

同協議会の今年の総会資料に掲げられた活動のキャッチフレーズは「クルーズ客船の新規寄港誘致と定点クルーズ定着を目指して」。クルーズ船社へのプロモーション活動、広報活動の展開、クルーズ振興の地域組織の設立及び組織強化、クルーズ客船の受入体制の充実、クルーズ人口拡大のための活動を行っていくという。

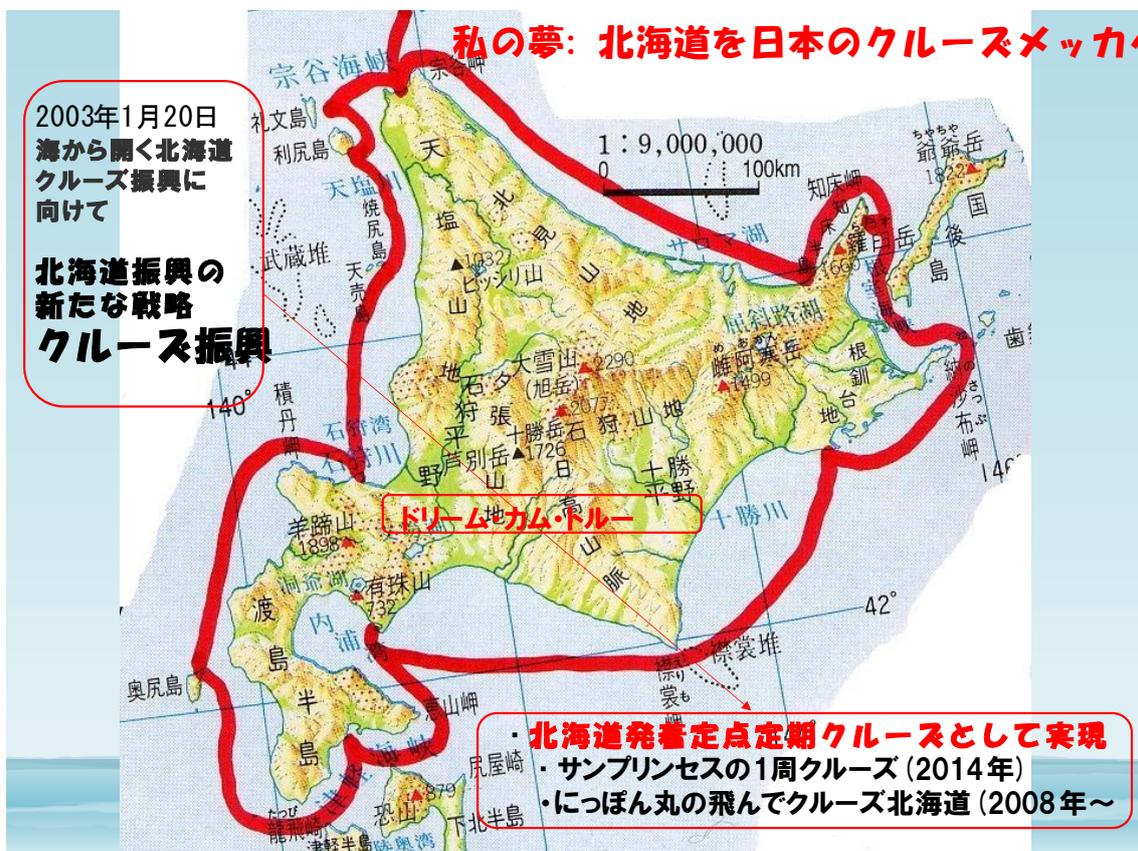


北海道クルーズ振興協議会の様子

総会の最後の時間をいただいて、世界のクルーズの現状についての報告をさせていただく機会を与えていただいた。この講演の中で、世界のクルーズ人口は、昨年、すでにコロナ禍前の 2019 年の実績値を 6%あまり超える 3150 万人に達しており、この実績に中国起点のクルーズが再開され

ると250万人余りが上乗せされることとなり、コロナ禍の不振を一挙に回復して急成長が予測されること、この成長には、コロナ禍の3年余りの間に建造された約53隻の新造クルーズ客船による3万床あまりの供給量の増加が寄与していること、コロナ禍に7万総トン未満の老朽クルーズ客船の解体が進んでクルーズ業界全体の質の改善が進んだことも利用者の満足度向上に寄与していることなどを説明した。

20年前の設立総会時の特別公演では、北海道の港を発着港とした北海道クルーズの実現を目指すように提言したが、その夢は、短期間で終わったものの「サン・プリンセス」の小樽発着の北海道1周の定点定期クルーズとして実現できたこと、そして「にっぽん丸」の定番となった「飛んでクルーズ北海道」は毎年継続されていることから、「ドリーム・カム・トルー」の言葉どおり、夢をしっかりともって着実に行動すれば実現につながるはずと述べた。飛行場からのアクセスがよい、小樽、室蘭、函館の港をハブとして、それぞれの港の特性に応じたクルーズ客船の発着港誘致の夢を持って欲しいと思う。年々温暖化が進む中、夏の北海道は避暑には最適な観光地で、アラスカのようなクルーズのメッカにすることも夢ではないと思う。最後に、今回の講演の最後に使ったパワーポイントのスライドを掲載しておく。20年前の設立総会で提案した北海道発着の北海道一周クルーズの夢を示したスライドに、これまで実現した「サン・プリンセス」の北海道一周クルーズと、「にっぽん丸」の小樽発着の「飛んでクルーズ北海道」を右下に加えたもの。夢を持ちつづけければ、きっと結果はついてくると思う。



総会終了後の講演会では、郵船クルーズの村山公崇経営企画部長から、「飛鳥クルーズの目指すもの」というタイトルで講演があった。飛鳥クルーズの歴史から紐解き、「飛鳥」、「飛鳥Ⅱ」によるクルーズの歴史と現状、そして2025年に就航予定の新造クルーズ客船の紹介があった。来年実施の世界一周クルーズは予約で満杯の盛況という。クルーズ愛好家にとっては待ちに待った世界一周クルーズなので、人気沸騰しているようだ。

新造船の総トン数は「飛鳥Ⅱ」より若干大きい51950総トンであるが、旅客定員は872名から約740名に減らした高級仕様となるとのことだった。LNG燃料、港での陸上電源の利用、ポッド電気推進器の採用、錨泊せずにD.P.S(ダイナミックポジショニングシステム)で船の位置を保持する機能などが盛り込まれるとのことであった。ここにも、新しい夢が生まれているように思う。